

看護学生の職業環境の認知*

—看護婦・医師・患者・病院に対するイメージの分析を通じて—

若林 満 佐野 幸子¹⁾ 水野 智

I. 問題

職業観を、その職業に対するイメージとして捉えようとする研究は少なくない。特に、看護婦という特定の職業に限った研究は、これまでも看護研究や看護教育現場の教員たちによってかなり多く行なわれている(藤原・進藤, 1980; 謝花・平良・安里・金城・新田・上地・砂川・許田・我如古・石川, 1984; 石塚・白佐・木村・水谷, 1982)。

これら看護婦イメージに関する研究は、ほとんど Osgood ら (Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H., 1957; 岩下, 1983) の S D 法 (semantic differential technique) に依拠したものであるが、単に既存の測定道具(形容詞対)を用いて既存の次元にしたがって集計したものが多く、看護婦イメージに特有の因子を見出している研究は少ない。また、これらの研究は看護教員が自校の学生を対象に実施したものであることが多く、看護教育養成制度の複雑性(愛知県衛生部医務課, 1985; 水野・大西・服部・若林, 1988)を考慮すると、1~2種の看護学校の学生の反応のみから看護学生全般が有する看護婦イメージを知ることは困難であると考えられる。さらに、看護婦イメージの研究において既に臨床に就いている看護職者を対象としたものは皆無に等しく、多くは看護学生のデータと、時に対照群として収集される看護系以外の学生のデータをもとにした研究に限定されているのが実情である。これに対し、本研究は看護職の職業観の発達を縦断的に研究するための測度のひとつとして、看護職の職業イメージ測定項目を作成しようとしている。そのために上述の看護婦イメージのほか、医師イメージ・患者イメージ・病院イメージについても同様の測定項目を作成する試みが行わ

れる。

看護職を取り巻く職業的な環境を考えた場合、看護婦イメージはまさに自己イメージであり自己の職業に対するイメージである。一方、医師は看護職にとって最も関連の深い職種であり、ある時には共働者、ある時には指示・命令を下す人、そしてある時には最も意見対立する立場の人として存在し、看護職とは対照的に病院組織内で一種の特権層として位置づけられる。このことから、看護職の職業不適応の原因として医師との関係が挙げられることも少なくない。また、患者は看護職にとってまさに日常業務の対象であり、仕事の上での最も大きな喜びの源泉であると同時に、悲しみや苦しみ、軋轢の源泉ともなりうる存在である。最後に、病院は看護職にとっての働く空間としての意味をもつと同時に、自分たちの行なう医療・看護という行為の象徴としての意味をも有する。

キー・コンセプトとなる以上4種(看護婦・医師・患者・病院)のイメージを測定することは、看護職を取り巻く職業的環境の把握を可能とする。さらに、その資料収集を縦断的におこなうことは、看護職の職業観の形成を明らかにし、職業適応の過程を解明する有力な手がかりを与えてくれる。

II. 研究の目的

本研究第1の目的は、看護学生ないし看護職の職業観の測定用具を確立することである。すなわち、看護職に関わりの深い4種のキー・コンセプト(看護婦・医師・患者・病院)について、水野ら(1988)が収集した形容詞のリストを使用しイメージを測定、各イメージに潜在する認知構造(因子構造)を同定し、これら各因子の測定に有効と思われる形容詞を特定することが目的である。さらに第2の目的として、これら4種のキー・コンセプトから抽出された各因子(次元)における看護系課程学生の学年間の相違、看護学生と非看護系学生の間での相違などを考察する。

* 本研究は、1988年5月に行われた東海心理学会第37回大会において口頭発表(佐野・水野・若林による)した草稿を修正加筆したものである。

1) 愛知学院大学

Ⅲ. 方 法

(1) 質問紙の概要

調査は質問紙法により、看護に関わりの深い4種のキー・コンセプト（看護婦・医師・患者・病院）に対するイメージを測定する目的で行なわれた。看護婦については51語、医師については48語、患者については47語、病院については36語の形容詞リスト（水野他，1988）を記載し、「次の各特徴は、あなたの『看護婦』イメージにどの程度当てはまりますか。」という表現で、「全く当てはまらない」（1点）から「非常に当てはまる」（5点）までの5点評定尺度での反応を求めた。『 』内の看護婦という概念は順次医師、患者、病院と変化し、形容詞リストも各概念と対応するものに置き換えた。

(2) 調査対象と調査方法

調査は、国立短期大学看護学科3年課程全日制女子（1年77名，2年48名，3年59名），私立看護専門学校3年課程全日制女子（1年29名），私立大学教育学部1年（男子29名，女子77名）を対象に，1987年10月～12月にかけて各学校の教室で授業時間の一部を利用して集団法にて実施された。

Ⅳ. 結果と考察

(1) 因子分析について

看護婦・医師・患者・病院それぞれの形容詞尺度への反応に対し個別に因子分析を施し，基本次元の抽出を試みた。用いた因子分析の手法は，初期値にSMCを用い共通性の反復推定を行なって主因子解を求め，バリマックス回転を施すものである。得られた因子数は，看護婦・患者・病院はいずれも4因子，医師は3因子であった。なおこれらの因子分析結果を付表として本文末に記載した。

まず，看護婦のイメージについて述べる。第1因子は「知識の豊富な」「判断力のある」「責任感のある」「頭が良い」などに負荷が高く，有能な看護婦のイメージを表現するものと考えられ，「有能性」因子と命名された。第2因子は「美しい」「かわいい」「素敵な」「天使のような」に負荷が高く，憧憬の対象としての看護婦像を表す次元と解釈でき，「『天使』性」因子と名付けられた。第3因子は「体力のある」「身体の丈夫な」など健康的で頑強な看護婦イメージを意味する次元と考えられ，「頑強性」因子と命名された。第4因子は，全般にネガティブな意味を有する形容詞が集まって形成された因子であるが，とくに「意地悪な」「冷たい」「恐ろしい」などに高い負荷量が示されていることから「陰険性」

因子と名付けられた。

第2は，医師についての因子分析結果である。第1因子は「判断力のある」「大変な」「偉大な」「冷静な」「立派な」などに負荷が高く，医師におけるさまざまな資質・能力・技術の優秀さを包括的に反映した次元と理解でき，「有能性」因子と名付けられた。第2因子は「暗い」「気難しい」「冷たい」「近寄りにくい」など全48項目中のネガティブなイメージを意味するもののほとんどに高負荷を示す因子であり，「非親和性」因子と命名した。第3因子は「親切な」「思いやりのある」「やさしい」の3項目に高い負荷を示しており，「配慮性」因子とされた。

第3は，患者のイメージに関する因子分析結果である。第1因子は「元気がない」「顔色の悪い」「哀れな」「身体の弱い」などに負荷が高く，病的なイメージや外見上の弱々しさに関する次元と解釈でき，「体の弱さ」因子と命名された。これに対し，第2因子は「不安な」「苦しい」「弱い」「さみしそうな」など内面的心理的な苦しみや弱々しさを意味する次元であることから，「心細さ」因子と名付けられた。第3因子は「自己中心的な」「気難しい」「頑固な」「わがままな」など患者の性格における他者への気遣いのなさが抽象される因子と考えられ，「自己中心性」因子とされた。第4因子は「やさしい」「忍耐力のある」「努力している」など患者の病気に負けない優しさや，ひたむきでけなげな闘病態度を反映したものと考えられ，「しんの強さ」因子と名付けられた。

最後に，病院のイメージに関する因子分析結果を述べる。第1因子は「きれいな」「清潔な」「設備の整った」「信頼できる」などの項目に負荷が高く，医療の場としての病院への信頼を示す「信頼性」因子と考えられた。第2因子は「さみしい」「孤独な」「暗い」「陰気な」など病院の持つさみしさや陰気なイメージにかかわる次元と解釈でき，「陰鬱性」因子とした。第3因子は「行きたくない」「嫌な」「近寄り難い」などに負荷の高い因子で，評価者が病院に対して持つ回避的態度を反映した因子であることから「忌避性」因子と命名した。第4因子は「あわただしい」「多忙な」「うるさい」に負荷が高く，職場としての忙しく騒がしい場を意味しており，「喧騒性」因子と命名された。

以上のように，看護婦・患者・病院においては各4因子が，医師においては3因子が同定された。以後これら各因子の因子尺度得点に基づいて分析を進めるため，それぞれの因子に負荷の高い項目（絶対値.5以上の負荷量を有する項目）を抽出し，その得点を単純加算することにより因子尺度得点を算出した。なお抽出した項目数は，看護婦と医師は20項目，患者と病院は18項目であ

資 料

表1 因子名とその項目および信頼性係数

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
看護婦	有能性(.834)	『天使』性(.812)	頑強性(.785)	陰険性(.785)
	知識の豊富な	美 しい	体力のある	意地悪な
	判断力のある	か わ い い	身体の丈夫な	冷 た い
	責任感のある	素 敵 な	多 忙 な	恐ろしい
	頭 が 良 い	天使のような	健 康 的 な	き つ い
	気 が き く	笑 顔 の	大 変 な	気 が 強 い
医師	有能性(.867)	非親和性(.797)	配慮性(.783)	
	判断力のある	暗 い	親 切 な	
	大 変 な	気 難 し い	思いやりのある	
	偉 大 な	冷 た い	やさしい	
	冷 静 な	近寄りにくい		
師	知識の豊富な	い ば っ た		
	しっかりした	か た い		
	責任感のある			
	技術のある			
	多 忙 な			
患者	体の弱さ(.780)	心細さ(.808)	自己中心性(.799)	しんの強さ(.673)
	元気がない	不 安 な	自己中心的な	やさしい
	顔色の悪い	苦 し い	気 難 し い	忍耐力のある
	哀れな	弱 い	頑 固 な	努力している
	身体の弱い	さみしそうな	わがままな	
	心 細 い	不 潔 な		
病院	信頼性(.804)	陰鬱さ(.831)	忌避性(.831)	喧騒性(.531)
	きれいな	さ み し い	行きたくない	あわただしい
	清 潔 な	孤 独 な	嫌 な	多 忙 な
	設備の整った	暗 い	近寄り難い	うるさい
	信頼できる	陰 気 な	痛 い	
	広 い	冷 た い		
	静 か な			

カッコ内は Cronbach の α 係数を示す

る。表1に、各因子の名称とそれらの因子の高負荷を示し、尺度得点の算出に用いられた項目を提示した。なおこれらの因子尺度の Cronbach の α 係数による信頼性については、病院の「喧騒性」因子 ($\alpha = .531$) を除く14因子で概ね満足できる値 (.673~.867) が得られた。なお、この信頼性係数の低い「喧騒性」についてもとくに削除はおこなわず、以後の分析に用いることとした。

2) イメージの学年間・課程間での較差について

看護婦・医師・患者・病院の各イメージの学年間・課程間の較差を調べるため、看護学生は学年別(3群)に、非看護系学生は男女別(2群)に群分けし、これら5群の群間差を分析した。なお、看護学生については看護養成課程間の差を考慮し看護専門学校学生を除外、国立短期大学看護学科3年課程学生のみを分析の対象とした。

表2は上記の5群の因子尺度平均値と標準偏差および群間での平均値の差の検定(一要因ANOVA)結果を

表2 因子尺度の群別平均値と群間差の検定結果

因子	看護1年 (77名)		看護2年 (48名)		看護3年 (59名)		教育1年男子 (29名)		教育1年女子 (77名)		全 群間差 (F値)	ダンカンの多範囲検定による 対比較 (p<.05水準)	
	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.			
看護婦	1. 有能性	18.39	3.28	19.48	2.98	18.96	3.02	18.17	3.33	17.94	3.27	2.20	看護2年>教育1年女子
	2. 『天使』性	13.82	3.21	15.08	2.93	13.84	2.81	17.59	4.50	14.70	3.93	7.45**	教育1年男子 >看護1年, 2年, 3年, 教育1年女子
	3. 頑強性	21.08	8.36	21.94	2.76	21.02	2.62	19.62	3.60	20.56	2.94	3.32	看護2年>教育1年女子・男子
	4. 陰険性	13.58	3.41	14.40	3.64	13.79	3.23	12.93	3.73	13.65	3.49	0.88	
医師	1. 有能性	39.96	5.65	42.21	5.01	39.12	5.41	40.07	6.72	13.95	5.82	2.10	看護2年>看護3年
	2. 非親和性	20.08	4.39	19.85	3.97	21.39	5.81	20.55	4.66	18.60	4.26	3.00	看護3年>教育1年女子
	3. 配慮性	9.17	4.14	9.08	1.94	8.91	2.05	8.86	2.23	9.61	1.66	1.44	
患者	1. 体の弱さ	17.53	3.06	17.94	2.82	16.79	3.23	19.34	3.30	18.90	3.23	5.88**	教育1年男子>看護1年, 3年 教育1年女子>看護1年, 3年
	2. 心細さ	19.05	2.93	19.56	2.72	19.91	3.19	19.45	2.87	18.92	3.64	0.89	
	3. 自己中心性	15.26	3.55	15.17	3.36	14.51	2.83	14.00	3.42	13.32	3.65	3.85	看護1年, 2年>教育1年女子
	4. しんの強さ	8.18	1.83	8.44	1.95	9.09	1.58	8.62	1.86	8.61	2.12	1.90	看護3年>看護1年
病院	1. 信頼性	21.78	3.62	20.46	4.04	19.30	3.52	22.62	4.48	21.86	3.82	5.66*	看護1年, 教育1年男子・女子 >看護3年
	2. 蔭鬱さ	14.94	3.49	15.54	2.80	15.54	3.96	15.45	3.38	14.78	4.50	0.57	
	3. 忌避性	12.79	3.62	12.96	3.40	13.21	3.21	15.45	3.43	13.88	3.95	3.52	教育1年男子 >看護1年, 2年, 3年
	4. 喧騒性	9.38	2.11	10.90	1.74	10.78	1.74	9.00	1.46	9.21	2.17	11.26**	看護2年, 3年 >看護1年, 教育1年男子・女子

* p<.05 ** p<.01

示したものである。表より明らかなように、看護学生間の較差に比べ、性差ないしは看護学生と非看護系学生間の較差の方が大きいことがわかる。全体群間差をみると、看護婦の「『天使』性」(F値7.45 $p < .01$)、患者の「体の弱さ」(F値5.88 $p < .01$)、病院の「信頼性」(F値5.66 $p < .05$)、病院の「喧騒性」(F値11.29 $p < .01$)の計4因子で有意差が認められた。

さらに看護婦・医師・患者・病院の各イメージの差を詳しく知るためにDuncanの多範囲検定により対比較をおこなった。その結果5%水準で有意差のみられた対比較も表2に記述してある。看護婦の「『天使』性」では教育1年生男子がその他の4群に比べて高く、性差がみられる。患者の「体の弱さ」では、教育1年の男女がともに看護の1年生、3年生より高く(F値5.88 $p < .01$)、看護系学生と非看護系学生との差を示している。病院の「喧騒性」では看護2年生・3年生の2群が看護1年生・教育1年生男女の3群に比べて高く、看護学生内の学年差と課程間較差とを示している。

さらに、このDuncanの多範囲検定に基づいて、看護学生の学年間でのイメージ変容に焦点をあてた考察を行なった。学年差が有意であった因子は医師の「有能性」(2年生>3年生)、患者の「しんの強さ」(3年生>2年生)、そして先述の病院の「信頼性」(1年生>3年生)、「喧騒性」(2年生>1年生、3年生>1年生)の計4因子であった。医師については、2年生のほうが3年生より有能であるとイメージしていたが、1年生の得点が2年生と3年生の中間に位置していることから、看護学生のもつ医師イメージは、学年にそって単純にネガティブな方向へと変容していくものとは言えないようである。患者については、3年生のほうが1年生より精神的に強いというイメージを有していることがわかった。さらに、上級学年になるにつれて得点は上昇することから、学年が進むにつれ看護学生はしんの強さという点において患者を見直す方向にイメージ変容をおこなっているといえる。病院については、信頼性において3年生のほうが1年生より低く、かつ、上級学年になるにつれて得点の減少を示すことから、学年が進むにつれ看護学生は病院とは清潔・整然としたものではない、というネガティブな方向へのイメージ変容が進んでいるといえる。また、病院の喧騒性については、1年生に比べ2年生と3年生のほうが喧騒なところであるとイメージしている。つまり、2年生の段階で病院の喧騒性についてイメージをネガティブな方向へと変容させており、先の病院信頼性因子尺度と類似の変化を示している。ところで、病院についてのイメージ変容の方向を「ネガティブ」という言葉で表したが、この変容は職業発達の観点から見ると必ずしも悪

いものと断言することはできない。というのは、1年生の時点では、病院というものを傍観者の立場で眺め、その実情を把握していないため比較的ポジティブなイメージを有していたものが、2年生以降は病院に対するより実際的な理解が深まり、病院の現実に即したイメージが形成されてきたという可能性も考えられるからである。

3) イメージ間構造について

看護職に関わる各イメージ間構造を知るため各因子尺度間の相関を求めた。分析の対象は前述の分散分析と同様に国立短期大学看護学科3年課程のみである。表3は、看護婦イメージの因子尺度間の相関を示している。1年生から3年生までを一括した短期大学看護学科3年課程全体の結果では、「有能性」「『天使』性」「頑強性」の3因子の間で1%水準の正の相関が、「頑強性」と「陰険性」の間で5%水準の正の相関があった。学年別の相関をみると、3学年を通じ相関が有意となったものは「有能性」と「頑強性」であり、1年生と3年生ではそれに加え「有能性」と「『天使』性」が、また3年生では「頑強性」と「『天使』性」にも有意な相関が認められた。この結果から、看護学生は看護婦として有能であることは健康で頑強であることに通じると一貫して認知しており、知・情・体がそろうことが良い看護婦の条件であると捉えていることがわかる。学年差を考察すると、1年生では看護婦の「有能性」と「『天使』性」の相関が.50と突出して高いが、2年生と3年生ではポジティブな意味をもつ因子「有能性」「『天使』性」「頑強性」の3者間の相関は一樣な高さとなる。一方、2年生において、有意ではないが「頑強性」と「陰険性」の間に.27の正相関がみられる点も特徴的である。

表4では、学年ごとの看護婦イメージの各因子尺度と、医師・患者・病院の各因子尺度との相関を示した。まず、看護婦イメージと医師イメージの相関について記述する。ネガティブな意味をもつ2種の因子、看護婦の「陰険性」と医師の「非親和性」との間で3学年を通じて高い正の相関がみられた。1年生では、医師の「配慮性」因子は看護婦の「有能性」「『天使』性」「頑強性」という3種のポジティブな意味をもつ因子と正の相関を示し、逆にネガティブな意味をもつ「陰険性」と負の相関を示した。ところが、3年生ではこれらポジティブな意味をもつ看護婦の各因子と医師の「配慮性」での相関は弱まり、医師の「有能性」と看護婦のポジティブな意味を示す「有能性」「『天使』性」「頑強性」の3因子との相関が正の方向に高いものとなっていた。これは、1年生の時点では「優しい先生と有能な看護婦」という傍観者のイメージで捉えていたものが、学習過程で医療に携わる職業人

表3 学年別にみた看護婦イメージ内での因子尺度間の相関と信頼性係数

	看護1年 (n=77)	看護2年 (n=48)	看護3年 (n=57)	看護全体 (n=179)
	看護婦 有能性『天使』性 頑強性	看護婦 有能性『天使』性 頑強性	看護婦 有能性『天使』性 頑強性	看護婦 有能性『天使』性 頑強性
看護婦 有能性	(.85)	(.79)	(.84)	(.83)
『天使』性	.50** (.77)	.35 (.66)	.56** (.87)	.48** (.74)
頑強性	.25 (.79)	.49** .34 (.82)	.37* .43** (.80)	.49** .36** (.78)
陰険性	-.14 -.25 -.04 (.79)	-.05 -.10 .27 (.80)	-.15 -.22 .04 (.80)	-.08 -.16 .22* (.80)

*p<.01 **p<.001
カッコ内はCronbachのα係数を示す。

表4 学年別にみた看護婦イメージと医師・患者・病院イメージ間での因子尺度の相関と信頼性係数

	1年 (n=77)	2年 (n=48)	3年 (n=57)
	看護婦 有能性『天使』性 頑強性 陰険性	看護婦 有能性『天使』性 頑強性 陰険性	看護婦 有能性『天使』性 頑強性 陰険性
医師 有能性	.29	.41*	.39*
非親和性	.13	.09	.11
配慮性	.35*	.31	-.03
患者 体の弱さ	.27	.50**	.51**
心細さ	.35*	.45*	.38**
自己中心性	.16	-.10	-.04
しんの強さ	.18	.21	.29
病院 信頼性	.24	.19	.20
陰鬱さ	.19	.14	-.11
忌避性	.29	.29	-.19
喧騒性	.03	-.02	.02
医師 有能性	.29	.32	.39*
非親和性	.13	-.34	-.05
配慮性	.35*	.36	.22
患者 体の弱さ	.27	.23	.44**
心細さ	.35*	.52**	.39*
自己中心性	.16	-.26	.02
しんの強さ	.18	.26	.24
病院 信頼性	.24	.28	.33
陰鬱さ	.19	-.11	.05
忌避性	.29	-.14	-.05
喧騒性	.03	-.02	.18
医師 有能性	.29	.32	.39*
非親和性	.13	-.34	-.05
配慮性	.35*	.36	.22
患者 体の弱さ	.27	.23	.44**
心細さ	.35*	.52**	.39*
自己中心性	.16	-.26	.02
しんの強さ	.18	.26	.24
病院 信頼性	.24	.28	.33
陰鬱さ	.19	-.11	.05
忌避性	.29	-.14	-.05
喧騒性	.03	-.02	.18
医師 有能性	.29	.32	.39*
非親和性	.13	-.34	-.05
配慮性	.35*	.36	.22
患者 体の弱さ	.27	.23	.44**
心細さ	.35*	.52**	.39*
自己中心性	.16	-.26	.02
しんの強さ	.18	.26	.24
病院 信頼性	.24	.28	.33
陰鬱さ	.19	-.11	.05
忌避性	.29	-.14	-.05
喧騒性	.03	-.02	.18
医師 有能性	.29	.32	.39*
非親和性	.13	-.34	-.05
配慮性	.35*	.36	.22
患者 体の弱さ	.27	.23	.44**
心細さ	.35*	.52**	.39*
自己中心性	.16	-.26	.02
しんの強さ	.18	.26	.24
病院 信頼性	.24	.28	.33
陰鬱さ	.19	-.11	.05
忌避性	.29	-.14	-.05
喧騒性	.03	-.02	.18

*p<.01 **p<.001
カッコ内はCronbachのα係数を示す

看護学生の職業環境の認知

表5 学年群を規準とした正準判別関数；
学年群（1年74名，2年48名，3年57名）

変数	第1判別関数		第2判別関数	
	判別係数	群内相関	判別係数	群内相関
看護婦				
有能性(看護婦)	.09	.11	.01	.25
『天使』性	-.03	.03	.21	.43
陰険性	-.05	.07	.13	.23
医師				
有能性(医師)	-.04	-.10	.13	.48
非親和性	.10	.19	-.12	-.17
配慮性	-.04	-.12	-.26	-.01
患者				
心細さ	.12	.18	-.13	.03
自己中心性	-.14	-.16	.00	.08
しんの強さ	.25	.31	-.16	-.11
病院				
信頼性	-.19	-.46	-.03	-.05
喧騒性	.28	.48	.20	.44
定数項	-2.04	—	.29	—
固有値	.443		.195	
寄与率	69.0%		31.0%	
Wilks' Λ	.584 ***		.837 ***	

*** $p < .001$

年生群 = .72, 3年生群 = -.29の群別重心を示し, 2年生群(正の方向)と1・3年生群(負の方向)を分ける次元を示した。第1関数では, 患者の「しんの強さ」(ウェイト [以下 β と記す] = .25, 群内相関 [以下 r と記す] = .31), 「喧騒性」($\beta = .28, r = .48$)に正の関連が, 病院の「信頼性」($\beta = -.19, r = -.46$)に負の関連が認められた。これは学年を追うに従い, 患者のしんの強さに対する認識を深めながらも, 現実の病院への幻滅(マイナスの信頼性)を増していく看護学生の姿を浮び上がらせている。一方, 第2関数は, 看護婦の『『天使』性」($\beta = .21, r = .43$), 医師の「有能性」($\beta = .13, r = .48$), 病院の「喧騒性」($\beta = .20, r = .44$)に正の, 医師の「配慮性」($\beta = -.26, r = -.01$)に負の関連を示す。この結果は, 2年生という時期が, 理想として抱く看護婦や医師の姿と, 現実として垣間見られる医師の無配慮や病院の喧騒の間で, 理想と現実のギャップに悩む時期, 換言すれば過去に持っていた職業イメージを崩壊させ新たな現実的職業イメージを構成する時期にあたることを示唆している。

V. 結果のまとめと今後の展望

本研究の目的は, 第1には, 看護学生および看護職の職業観の測定用具の作成を目指し, 看護に関わる4種のキー・コンセプト(看護婦・医師・患者・病院)を記述する形容詞リスト(水野他, 1988)を用いて, これらのリストからそれぞれの概念の基本次元を抽出すること, 第2には, これらの次元(因子)の看護系課程学生における学年差および看護系と非看護系学生の課程間差について考察を加えることであった。

調査は1987年10月~12月にかけて, 国立短期大学看護学科3年課程全日制女子(1年77名, 2年48名, 3年59名), 私立看護専門学校3年課程全日制女子(1年29名), 私立大学教育学部1年(男子29名, 女子77名)を被調査者とし, 質問紙法によっておこなった。

因子分析の結果, 看護婦イメージについては「有能性」, 「『天使』性」「頑強性」「陰険性」の4因子を, 医師イメージについては「有能性」「非親和性」「配慮性」の3因子を, 患者イメージについては「体の弱さ」「心細さ」「自己中心性」「しんの強さ」の4因子を, 病院イメージに

については「信頼性」「陰鬱性」「忌避性」「喧騒性」の4因子を抽出した。各因子の信頼性は、病院の「喧騒性」を除き概ね良好なものであった。

看護婦・医師・患者・病院それぞれのイメージ因子における、看護学生の学年間較差、看護学生と非看護系学生の課程間較差を検討した。その結果、看護婦・医師・患者・病院のイメージ因子における差は、看護学生内の学年差に比べ、性差ないしは課程間較差の方が大きいことがわかった。

さらに、看護学生の学年にともなうイメージ変容もいくつか明かとなった。第一に、病院イメージの「信頼性」では3年生が1・2年生に比べて低く、病院の「喧騒性」では2年生・3年生が1年生に比べて高い。つまり、看護学生の病院イメージは学年を追うに従いネガティブなものとなるようであった。第二に、医師の「有能性」は、2年生が最も高く（有能であると）認知していること、第三に、患者の「しんの強さ」については1年生より3年生の方が強いと認知していることなども明らかとなった。

看護学生について、看護婦イメージの各因子尺度の相互相関を求めたところ、3学年を通じて相関が有意なものは「有能性」と「頑強性」であった。また学年別の特徴では、1年生では「有能性」と『「天使」性』の相関が.50と突出して高く、2年生と3年生ではポジティブな意味をもつ「有能性」「『天使』性」「頑強性」の因子間で相関が一様に高いものとなっていることがわかった。

また、看護学生の看護婦イメージと医師イメージの因子尺度間相関については、3学年を通じネガティブな意味をもつ看護婦の「陰険性」と医師の「非親和性」の間で高い正の相関がみられた。さらに、1年生では医師の「配慮性」因子が看護婦イメージの各因子と有意な相関をもつが、3年生では医師の「有能性」因子が看護婦イメージの各因子と相関をもつようになる。つまり、1年生では「優しい先生とよい看護婦」という捉え方であったものが、3年生では医療に携わる職業人としての自覚が芽生え、「有能な医師と有能な看護婦」というより実践的な捉え方に変容するのであろう。看護学生の看護婦イメージと患者イメージの相関においては、有意なものは1年生ではわずか3つであったのに対し、2年生では6つ、3年生では7つと増加しており、学習過程の中で患者を自己の職業の対象者として捉えるようになり、自己の目指す看護婦という職業イメージと患者イメージとが関連を深めていったと考えられる。

正準判別分析をおこない看護学生の学年較差をさらに考察したところ、第1関数（第1の正準変量）からは、

学年を追うに従い患者のしんの強さに対する認識を深めながらも現実の病院への幻滅を増していく姿が、第2関数（第2の正準変量）からは、2年という時期から、理想としての看護婦や医師の姿と現実のネガティブな医師や病院の姿との間のギャップに悩む様子が明らかとなった。

本研究は、1988年に開始した（正）看護婦養成各課程の学生を対象とする10年間の縦断研究の予備的研究という位置づけにある。この縦断研究の目的は、複雑多様な看護教育養成課程の影響を考慮した上で看護学生や看護職の職業イメージの発達のな変化を捉えようとするところにある。近年、看護職にしばしば見られるバーンアウト（フロディンバーガー, H. J., 1980; 猪下, 1986; 田尾, 1989), リアリティショック (Kramer, M., 1974; 井部・上泉, 1986; 若林・鹿内・後藤, 1982) などの職業適応に関する問題が提起され、看護職の職業発達、職業適応の動態を明らかにする研究が待たれており、本研究で提出した看護職の職業イメージ測定項目は、この種の研究に有用な道具立てを提供するものといえる。なお、各イメージ因子の学年間比較に関する分析では調査対象者も少なく、教育養成課程も限られたものであったため、得られた結果を看護学生全体に般化することは差し控えなければならない。しかし本研究で得られたいくつかの特徴的な知見によって、看護学生においては学年につれての発達のな変化が存在すること、このような変化が本研究で提出した項目で測定可能であることを明らかにしたことは確かであり、本研究は今後のわれわれの縦断研究を促進するものであったと評価できよう。

引用文献

- 愛知県衛生部医務課 1985 看護への道
 藤原ヤスエ・進藤正代 1980 看護婦像に関する一研究
 看護教育 21, 624-633.
 フロディンバーガー, H. J. 川勝久訳 1980 バーンアウトシンドローム 三笠書房.
 井部俊子・上泉和子 1986 新卒看護婦のリアリティショック 看護展望 vol.11 568-574.
 猪下 光 1986 看護職のバーンアウト現象とその発生要因に関する文献研究 看護展望 vol.11 49-55.
 石塚百合子・白佐俊憲・木村泰子・水谷一郎 1982 看護婦イメージの研究 看護教育 23, 446-453.
 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定 川島書店.

看護学生の職業環境の認知

- Kramer, M. 1974 Reality Shock Mosby 1974.
- 水野 智・大西幸子・服部美保子・若林 満 1988 看護学生の職業観測定のための予備的研究—「看護婦」「医師」「患者」「病院」の各語から連想される形容詞の収集 経営行動科学 vol.3 No.1 41-50.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957 The measurement of meaning, Urbana, Univ. Illinois, Illinois.
- 謝花美佐子・平良広子・安里栄子・金城靖子・新田美恵子・上地悦子・砂川瑞枝・許田英子・我如古栄子・石川清治 1984 看護学生の看護婦イメージの学年別による検討 看護教育 25, 89-94.
- 田尾雅夫 1989 バーンアウト, ヒューマン・サービス従事者における組織ストレス 社会心理学研究 vol.4 91-97.
- 若林 満・鹿内啓子・後藤宗理 1982 キャリア発達と職業自己像—女性専門職の場合 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)第29巻, 137-155.
(1989年7月31日 受稿)

資 料

付表1 「看護婦」のイメージ：因子分析結果 (N=315)

項 目	1	2	3	4	h ²
「有能性」					
26 知識の豊富な	.688	.290	.089	-.063	.569
21 判断力がある	.641	.141	.283	.050	.513
28 責任感のある	.614	.230	.340	-.150	.567
3 頭がよい	.587	.176	-.002	-.098	.386
23 気がきく	.577	.307	.272	-.223	.551
40 はきはきした	.559	.204	.364	.082	.493
2 機敏な	.558	.026	.325	-.155	.442
31 冷静な	.549	.201	.176	.092	.382
27 忍耐力のある	.536	.193	.350	-.075	.452
32 勇気のある	.533	.344	.193	.196	.478
22 思いやりのある	.527	.381	.254	-.378	.630
14 しっかりした	.502	.167	.335	.066	.397
37 信頼できる	.497	.385	.300	-.290	.570
39 行動的な	.493	.270	.375	.076	.462
47 器用な	.472	.392	-.005	.235	.387
6 厳しい	.432	-.090	.280	.342	.390
『天使』性					
49 美しい	.132	.761	-.098	.037	.608
29 かわい	.019	.638	-.139	.065	.431
51 素敵な	.315	.633	-.088	.001	.508
43 天使のような	.177	.627	.122	-.090	.447
36 笑顔の	.292	.561	.286	-.284	.563
15 きれいな	.123	.525	.235	-.019	.346
17 暖かい	.296	.495	.273	-.239	.465
11 明るい	.185	.470	.445	-.256	.519
50 真面目な	.376	.449	.081	.100	.360
48 世話好き	.262	.426	.166	-.125	.294
頑強性					
35 体力のある	.242	.214	.658	.129	.554
8 身体の丈夫な	.087	.190	.627	.032	.438
9 多忙な	.310	-.099	.559	.128	.434
16 健康的な	.109	.401	.541	.042	.467
10 大変な	.279	-.053	.525	.148	.378
19 重労働な	.175	-.068	.524	.234	.364
38 根性がある	.439	.227	.497	.061	.494
陰険性					
25 意地悪な	-.148	-.123	.021	.639	.446
45 冷たい	-.019	-.102	-.010	.612	.386

看護学生の職業環境の認知

13	恐ろしい	-.103	.049	.095	.605	.389
24	きつ	.116	-.176	.241	.586	.446
18	気が強い	.167	-.118	.337	.539	.446
1	やさしい	.289	.379	.122	-.504	.495
20	強い	.258	.023	.444	.450	.467
33	危険な	.186	.217	.040	.401	.244
41	消毒くさい	-.110	.173	.073	.429	.231
46	難しい	.390	.016	.071	.401	.319
残余項目						
4	女性的な	.252	.382	.139	-.132	.246
5	清潔な	.275	.365	.169	-.242	.296
7	親切な	.386	.376	.369	-.379	.571
12	白い	.023	.398	.169	.050	.190
30	カッコいい	.261	.372	-.040	.223	.258
34	献身的な	.359	.372	.340	-.028	.383
42	力のある	.188	.244	.376	.343	.354
44	えらい	.231	.170	.214	.141	.148
因子寄与		13.143	4.707	2.333	1.470	

付表2 「医師」のイメージ：因子分析結果 (N=316)

項目	1	2	3	h ²
有能性				
14 判断力のある	.678	-.161	.046	.487
13 大変な	.660	-.075	-.094	.450
15 偉大な	.652	-.029	.056	.428
17 冷静な	.650	.005	.131	.439
20 立派な	.577	.034	.158	.359
22 知識が豊富な	.655	-.007	-.005	.429
30 しっかりした	.633	-.031	.181	.435
12 責任感のある	.622	-.210	.027	.432
39 技術のある	.578	-.024	.048	.336
18 多忙な	.549	-.026	.086	.309
6 頼りになる	.546	-.160	.265	.394
36 敏捷な	.536	.008	.283	.368
19 語学が堪能な	.530	.202	.078	.328
37 勇敢な	.530	.059	.323	.388
28 勉強熱心な	.508	.121	.222	.323
1 頭が良い	.497	-.026	-.041	.249
16 真面目な	.495	.106	.304	.349
27 器用な	.460	.067	.098	.226
35 清潔な	.445	-.160	.337	.337

資 料

7 厳 しい	.431	.227	-.007	.237
34 強 しい	.410	.220	.349	.338
非親和性				
48 暗 しい	-.118	.638	-.009	.421
23 気 難 しい	.180	.616	-.186	.447
8 冷 た しい	.016	.613	-.376	.517
43 近 寄 り に く い	.111	.574	-.132	.359
42 変 っ て い る	-.012	.570	-.023	.326
10 い ば っ た	.049	.555	-.392	.464
33 固 しい	.169	.551	.106	.343
46 軟 弱 な	-.062	.541	-.066	.301
11 わ が ま ま な	-.000	.536	-.237	.344
47 ケ チ な	-.117	.525	-.106	.300
29 頑 固 な	.175	.517	-.015	.298
45 無 表 情 な	.031	.468	.023	.221
40 い い 加 減 な	-.368	.458	-.052	.348
9 い や ら し い	-.129	.439	-.291	.294
44 年 老 い た	.018	.425	.177	.212
4 恐 ろ し い	.176	.421	.008	.208
配 慮 性				
25 親 切 な	.273	-.199	.624	.504
38 思 い や り の あ る	.318	-.281	.577	.513
3 や さ し い	.174	-.230	.563	.401
残 余 項 目				
2 金 持 ち な	.212	.259	-.160	.138
5 カ ッ コ い い	.329	.113	.076	.127
21 危 険 な	.379	.223	.025	.194
24 身 体 の 丈 夫 な	.303	.087	.304	.192
26 男 性 的 な	.394	.078	.187	.196
31 太 っ た	-.024	.325	.134	.124
32 エ リ ー ト な	.355	.319	-.108	.240
41 難 し い	.322	.196	-.020	.143
因 子 寄 与	8.599	5.778	1.440	

看護学生の職業環境の認知

付表3 「患者」のイメージ：因子分析結果(N=313)

項 目	1	2	3	4	h ²
体の弱さ					
17 元 気 の 不 足	.708	.142	.071	.116	.539
14 顔 色 の 悪 い	.587	.234	.074	.009	.405
38 衰 れ な	.587	.241	.143	.092	.432
9 身 体 の 弱 い	.555	.382	-.025	.025	.455
20 気 の 毒 な	.545	.346	.079	.131	.440
35 不 健 康 な	.487	.173	.209	-.073	.316
33 病 的 な	.484	.292	.045	-.030	.323
8 や せ た	.470	.307	.100	.029	.326
36 寝 た き り の	.465	.069	.264	.048	.292
15 悲 し い	.458	.435	.126	.246	.476
6 暗 い	.424	.189	.420	-.046	.394
30 無 口 な	.420	.060	.408	.183	.381
22 お と な し い	.413	.027	.215	.372	.356
心細さ					
10 不 安 な	.113	.727	.079	.234	.602
11 苦 し い	.301	.642	.144	.186	.559
2 弱 い	.293	.602	.039	-.057	.454
4 さ み し そ う な	.263	.567	.196	.080	.436
29 心 細 い	.225	.554	.159	.305	.476
1 孤 独 な	.117	.518	.259	-.013	.349
3 か わ い そ う な	.479	.511	-.002	.062	.494
26 心 配 な	.229	.508	-.020	.235	.366
7 痛 々 し い	.407	.453	-.005	.039	.373
47 大 変 な	.195	.434	.007	.320	.329
13 辛 い	.240	.400	-.017	.231	.271
自己中心性					
21 自 己 中 心 的 な	-.007	.010	.767	-.012	.589
31 気 難 し い	.111	.171	.670	-.013	.491
27 頑 固 な	-.075	.206	.666	-.071	.496
5 わ が ま ま な	.006	.120	.607	-.152	.406
19 不 潔 な	.219	-.068	.534	.059	.342
39 う る さ い	.067	-.121	.527	.037	.298
18 神 経 質 な	.252	.247	.416	.146	.319
しんの強さ					
25 や さ し い	.074	.114	-.149	.627	.434
34 忍 耐 力 の あ る	.024	.074	-.054	.575	.339
23 努 力 し て い る	.056	.167	.049	.504	.287
42 明 る い	-.194	.054	.042	.459	.253
残余項目					
12 気 の 弱 い	.329	.277	.316	.220	.333

	資		料		
16 依存的な	.386	.117	.307	.147	.278
24 退屈な	.086	.183	.203	.183	.156
28 年老的な	.183	.178	.381	.071	.216
32 暇な	.174	.154	.210	.168	.126
37 精神不安定な	.280	.367	.383	.029	.360
40 危険な	.199	.028	.297	.238	.186
41 おびえている	.227	.356	.251	.222	.291
43 敏感な	-.121	.329	.194	.262	.229
44 小さい	.262	.065	.155	.316	.197
45 えらい	.130	.231	.011	.320	.173
46 心を病んだ	.171	.382	.294	.100	.272
因子寄与	10.599	3.019	1.875	1.378	

付表4 「病院」のイメージ：因子分析結果(N=316)

項目	1	2	3	4	h ²
信頼性					
20 きれいな	.759	-.157	.046	-.053	.606
8 清潔な	.754	-.101	.025	-.106	.590
27 設備の整った	.622	.018	-.001	.118	.401
15 信頼できる	.618	.065	-.073	.142	.442
9 広い	.577	.173	.056	.101	.377
7 静かな	.561	.349	.164	-.298	.552
23 親切な	.505	-.141	-.058	.087	.285
6 大きな	.462	.265	.062	.158	.313
10 不潔な	-.420	.291	.022	.322	.365
14 緊張感のある	.418	.261	.131	.206	.302
32 暖かい	.415	-.199	-.021	.172	.242
36 安心な	.404	-.136	-.264	.194	.289
陰鬱さ					
12 さみしい	.023	.750	.180	.064	.599
11 孤独な	.063	.701	.116	.081	.516
5 暗い	-.076	.588	.261	.043	.421
26 陰気な	-.125	.585	.395	-.002	.514
4 冷たい	-.068	.555	.384	.051	.462
30 寒い	-.104	.549	.177	.083	.351
21 固い	.150	.419	.238	.070	.260
28 厳しい	.185	.411	.145	.188	.260
忌避性					
18 行きたくない	-.034	.154	.849	-.048	.748

看護学生の職業環境の認知

24	嫌	な	.037	.259	.753	.076	.641
19	近	寄り難い	-.037	.205	.723	.001	.566
17	痛	い	.122	.148	.522	.208	.352
3	恐	ろしい	-.021	.414	.496	.067	.422
33	不	安	-.012	.305	.443	.198	.329
喧騒性							
35	あ	わただしい	-.089	.158	.030	.593	.386
13	多	忙	.249	.053	-.021	.527	.343
34	う	るさい	-.335	.077	-.057	.522	.395
16	人	が多い	.273	-.122	.078	.495	.341
31	大	変	.298	.130	.174	.445	.334
残余項目							
1	消	毒くさい	.100	.192	.386	.008	.196
2	白	い	.342	.119	.097	-.031	.141
22	待	ち時間が長い	.102	.135	.239	.350	.208
25	危	険	-.019	.338	.296	.197	.241
29	機	械的	.150	.234	.188	.321	.216
因子寄与			6.443	4.368	1.906	1.288	

ABSTRACT

Perceived Occupational Environment Among Nurse Students:
Analyzing Images on Nurse, Doctor, Patients and the Hospital
Mitsuru WAKABAYASHI, Sachiko SANNO, Satoshi MIZUNO

Four concepts, namely Nurse, Doctor, Patients and the Hospital were measured by using four different sets of SD scales, based on a group of nurse students (1st-year students=77, 2nd-year students=48, and 3rd-year students=59), and university freshmen (male=29 and female=77) on the October-December period, 1987. Results of a series of factor analyses produced 4 factor scales for Nurse, Patients and the Doctor respectively, and 3 scales for the Hospital. These scales were found to be representing key dimensions, i.e., *images* of the psychological environment for the nurse students who were on the process of occupational socialization in the college.

Mean differences in factorially derived image scales were tested among nurse students in different grade years, and between the nurse students and the university freshmen. It was found that grade-year groups within nurse students constitute a greater source of variance in explaining image scales, relative to the nurse vs. freshmen differences. Particularly, the 3rd-year group were found to be more realistic in perceived images of Patients and the Hospital.

Moreover, it was found that factors representing nurse's self-image (particularly a competence self-image) tend to correlate more strongly and extensively with factors concerning other facets of nurse's psychological environment, i.e., those of Patients, Doctor and the Hospital. This finding indicates that the perceived occupational environment among nurse students becomes more solid and integrative around the nurse's own competent self-image, as the process of occupational socialization unfolds from the 1st- to the 3rd-year in the college.